



西へ13格
1279
卷 11

曲亭主人著

壬辰肇春
第三輯
五弘

近世說美少年錄

葵岡北溪画 文溪堂精刊



利田

胡之採珠者懼爲人所奪遂劈股以藏珠焉是非不愛其股爲利珠已由此觀之惑利則忘愛是以有售其子者溺愛則忘訓是故兒孫置孝悌名之爲迷悞世間有此病何以治之言有一方無如稗史小說也蓋稗官架空之談妙示勸懲而不迂善入里耳因所忤風俗澆腐厭常耳食新奇因其勢以獎導之乃效驗非淺鮮也言許胤宗嘗以醫爲意稗亦出於意匠而有巧在拙拙則亡論巧者多隱微知之不易矣其知與不知吾惡是是書復續稟至第三輯刷人告成之日聊亦題一簡在

天保二年如月中澣

曲亭蟬史撰

近世說美少年錄第三輯總目錄

壹卷

第廿二面

飛獵箭晴賢極麗人
追妖獸直行遭少年
上市御斧柄倡恩人
感奇偶落葉妻姪女

貳卷

第廿三面

知母補益獎遠志
車前論效留當歸
直行惡方恣加減
晴賢竊嘗駭中毒

三卷

第廿四面

聽訟順政知賊情
陳端落葉乞恩謝
齊多金落葉遺女婿
索唐布晴賢遇義弟

四卷

第廿七面

示仙術舌俞哄騙
戊丹湖福富涼指
詰毒有驗觀破爐
耽慾大夫次亡家

五卷

第廿九面

遺諫景市赴西都
分壁黃金辭東行
關閨門荷三太逐客
宿妓樓朱之介值禍

第三十面

第三輯目錄終第一回至第二十四目錄見第一第二兩輯簡端

美少年錄

第三輯



賢如孟母才似柳孃
 斷機嚴訓和熊宜嘗
 整居辭客進退有方
 仗義應報舊綠弗忘
 離離落葉歷幾風霜
 化入仙境遺德流芳

上市落葉

贊義姑落葉

安保前五郎直行

像贊第十三



病坊
 三尾復四郎

病坊

三尾復四郎

像贊第十四



伎倆
 騙術
 眩惑彼愚
 以慾倡慾詐在丹爐
 妖麗資惡域之與狐
 黃白傾竭富翁得辜
 任俠不識餘孽雖紆
 竊解行裏善救末朱

有驗觀主

像贊第十五

十三屋
九四郎



伊勢は利尻に死せ
 とあはれと海河舟乃
 以のふお伎ら武
 ね表や一結あま

雕
窓

有驗觀
小槌

了
見

了
打出

像贊第十六

作者云草紙物語と批評をのり猶五味と嘗るが如く甘淡を好むを辛辣を嫌ひ
 酸を嗜むに苦澁と鹹を妙とせむ好憎ある随ふも作者の隱微を亮察して深く
 骨髓に入るの稀に獨勢坂の標亭氏の素より神中のみありその著述所ありて
 世不知れり乃者標亭郵書中も美少年録二の編輯と批評と予の當不問
 けざらんと閱せし五味みろち味ひて好憎偏らるる深く作者の肺肝を撻
 隱微を發明せしむる。実の才子のつらむと播遣措くも彼金瑞が水滸傳の外
 書小做すもあなれも録してあふ見せし好む君子小せすまほし紀の知立音のあまの
 ○琴魚云美少年録第一輯の發端大内義興の阿蘇山攻の圍戰の光景を畫
 りまじして沼の出水もて埒をあけ又地中より火を發して香落城をうつられの初りて
 看官の倦げん為ふと趣向と建てる省筆るべしこの水火を傲れる大将を恐嚇せ
 り妙にこれあり火地雷火と分鮮せ阿蘇の大官司が義興を射る段の山の燃る往
 古より一所あり云云といひせ君が刃の斬るて云云といひせ淡くみゆる書做したる

中の母貝目の中心とけとく看る所大約の一田の水火既濟 三三の象あり既濟の象成
 就せりあれども又散れり速るの譬大内氏の富貴る義興の時極りの既濟の象成
 かくその嗣義隆に至る速滅亡を故の君子の既濟の時方て後の憂患災害を慎
 むとの稱又既濟の火上水の中水火相交りその形を成るの用と通まふと後
 悪少年の生出ると美少年の世顯る大意を竊示されり亦是水火既濟の象成
 あり恐入る神機妙算凡作の及所あり又弘元が辨才天を深信と且義興と諫め又
 出水の推流されし時の神を祈念せしその信心と融まふて素宅六と解后の役
 至りその情状とあり終始味ひあり又出水の光景と書つられ所川下日本橋
 至るのまじりある实景と一時の洪水その枝川にありとあり予も目撃せしと
 こと感深る又素宅六夫婦の弘元と管待と段小雜魚小塩と云云の野そ
 摘のありせ物云云と今ふすめ錦心綉口まよふも及びる也と予も
 六が嘉吉と心仁の乱基と論ぎ段小男色の害ふとてその世の乱れと説諱されり

條々みる金玉の言への段の頭書もそえる如く一部の要領の中小笠原を説
 治て意味深長赤川角頓太鳥銃引提て出づる看官胆と浸き奇妙趣
 向るる又義貞の蛇穴を焼く段も骨悚然として百多は寒く坐敷のうもあは
 大蛇焼爛れて死する景迹実お怨を送りてらんとかのうの全々作者の書言が
 めへ八犬傳伏姫自殺の段との段の水滸傳の發端一百八の魔鬼と走せ趣向より
 出づる来りとの段もものも皆換骨奪胎の段ゆてその趣同くぞ義貞と下
 免の弘元の諫を怒りて言せんといひ蛇怪の一事おはし入ると弘元と賞美の段人情
 寔然とあり總てその人がと瞭然とてたる如く叙第四回瀨十郎が麻野の仕堂
 ゆく阿夏お邂逅の段上の時代物語と忽地小機のかかる処亦ありろそは瀨十郎が
 近き東より持資入道の云々云々の當時の洒落るゑあ亦看官の心する作者の
 用心ありの時瀨十郎が雨衣木履あり阿夏おあはるゆれが阿夏お足走せいよ
 びよと出づる身榮るる瀨十郎が借物の足駄を阿夏お貸て穿せる瀨十郎が

足の遣り所するべし難義の場も幸ひく仕堂の隅の送足駄ありを折
 介がたせし妙の又妙ゆても心用られりゆて阿夏瀨十郎が相合金の段む妙文
 人有てらちかていひも形勢の巻中に出頭と動く如くその中は路地の地名とくま
 ゆく処をそれる瀨十郎二階ありち降りてそとをめぐりて形勢も真小逼りて柱をけり
 櫻の花笠牡丹の扇笠を三弦胡弓あはるそその人かを猜事も亦妙く且折介と且く遠
 離れた女との斟酌目前の如くされ又水偶人の阿夏おある迷ひる像亦その産を破
 りより阿夏お恩義の柳を被られ己ごのま津浦に入替おをそれる奴僕のとく役使ひく
 生活の祓物より運せ容稀め朝の煙の細るるも夏とせり今も比類をふより
 ありその情態寫しゆく妙又阿夏瀨十郎の送扇の歌なる段の班女の故事と語
 曲よりと判明せもその人柄のゆきり又又嵯峨の山莊縁異の亭號ハ堂でも心か
 休くあ山莊のあされ蛇薛の胎小のちらんとの頭書と誰もあえけれこの一
 段の初中後ゆて感たありありあり脚のちるも殿下の脚館小赴を以て阿夏

瀬十郎が再會する処艶小しと且因果を説き勸懲の意も筆竟りたる。白蛇は阿
 夏を晋小寅縁で肌膚を舐る光景をとりしも亦の如く。瀬十郎の氣絶させ
 白蛇の往方を隠した意味深き。第六回瀬十郎の怨あり。周防返さ
 段小光四郎を遣て竊小消息を贈らる。兼頭卿の人から実小粹多措紳家
 配流ると其の妻と訣別ある趣とを更かき。密小契す。情人の哀別る。情
 態又憐む。就中稚兒のふ一文字の入りし。再會の割符小せし新奇
 ぬて磨鉢峠の段小至る。阿夏小重々の厄を被らせ密ませし後悔さる。看
 官小あられせし。作者の用心専文の場々又阿夏が神僧小遭段小往又と説て後
 来を示さる。只その窮厄の解んと論たら妙を又阿夏が夢小轉と。その相
 ぶら黒花が深さ吊をわたり毒石の落るより毒殺と。自然のど。看官
 必二賊と毒酒の殺さるんと。又一轉と相殺の趣向尤精妙なる。

珠之介の妻と二賊の枉死と。駭然と。又と揚て信と。初珠
 之介の流るる。其の氣貫も。時より露れ。阿夏が過來。此の物語の段小
 偶介が。瀬十郎の。説示して。自殺せんとせし。珠之介は諫られ。瀬十郎は
 其の意を。内小合と。自刃せし。自然のど。よも浮流の淫婦も。死さんと
 せし。人心の禽獸も。異る所。穿ぬて。復れ。二賊の亡骸を埋んと。婦人の情也。
 亦鳥獸も。異る。然る。珠之介の。亡骸の片つけ。玉夫と。あられ。其
 錢三文。も。送り。送して。生涯の損を。母小。つけ。身より。先。納戸小。寝。熟
 睡。あ。為。体。自然。あ。悪少年の。氣貫。精細。寫され。妙絶。か。阿
 阿夏母子が。山。出。段小。緑。異亭の。山。路。の。光景。寫。中。の。
 葛。又。枯藤の。核。小。蟻。の。細。似。妙。文。の。句。特。深。山。中。の。
 遠景。宛。石。子。の。画。異る。妙。細。谷。川。の。流。馬。失。此。の。路。を。意。馬。心。核。在
 金銀。失。妙。智力。の。草。舎。小。後。喪。谷。川。小。流。意。馬。心。核。在

態を推鎮ゆよ。この厄難を救はる。作者廿廿の善巧方便妙とらんも。あまの
 神出鬼没の手段が久礼細の玉池村の母子宿を投て五色の玉の出处と
 それをよほ福富に至る段初輯巻末の縁像をれ。又後輯を俟る。大天次が物
 らは蛇籠の中の一と五色の玉と。又阿健が臨月の期は過ぎ。十二月の蛇
 退皮と煎と飲と。黄金を産するも。大徳の玉の出处と前後と似る。これ
 大く趣をかえられ。自由自在の筆をふる。但大夫五休書を送て亡命せし。二條
 の三の形。故放りて抑る。公相の年中の著書十数部を俗の書にけし。書中
 一。この創稿も。易えぬ。信へる。公相の類する。後の世も。有る。か
 らん。然る。か。あ。れ。琴。魚。多。が。切。小。筆。と。走。々。評。さ。る。嗚。呼。が。ま。く。打。出。の。枕。は。似。れ
 ど。あ。ま。の。心。を。つ。て。熟。讀。熟。思。せ。よ。と。生。ま。れ。ぬ。拙。評。の。當。不。同。人。為。あ。り。け。る。
 右標亭氏の批評。第二輯の評も。あれ。毎。巻。楮。故。不。定。限。あ。れ。ま。あ。り。附。録。ま。り。
 その異日第四輯を著。折。又。簡。端。の。評。中。の。水。火。既。濟。と。意。馬。心。猿。の。特。め。で。り。

近世説美少年録第三輯卷之一

東都 曲亭主人編次

第二十一回 獵箭を飛して暗賢獵人を極め 妖獸を追て直行少年は遭ふ

再説末朱之々暗賢の獵する。な。鷹。捉。山。は。暁。天。を。俟。つ。石。室。の。内。も。あ。る。圖。の
 邊。樹。間。隠。れ。り。箭。を。刺。ひ。く。あ。れ。物。の。近。づ。き。其。外。張。る。折。る。皆。暗。の。天
 齊。く。玉。兔。鮮。明。の。深。山。路。小。叫。ぶ。女。子。の。聲。嗚。れ。く。這。裡。を。投。て。伴。を。但。見。れ。八
 可。る。最。美。し。た。少。女。子。を。扛。て。來。ぬ。物。の。け。り。その。容。貌。宛。獼。猴。小。似。く。身。長。大
 許。る。と。四。尺。あ。ま。る。は。妖。怪。の。此。彼。傳。ふ。面。緒。く。頭。の。真。白。小。長。毛。の。連。て。茶。と。竹。の
 無。れ。と。人。飲。と。え。れ。人。あ。ら。ぬ。獸。類。と。獸。異。る。は。這。物。們。の。妙。の。多。淺。捉。へ
 足。を。拘。り。宙。吊。り。く。ね。て。來。り。と。石。室。の。裡。面。小。却。と。何。言。や。ん。置。か。と。相。罵。

海を渡りてこれ妙なる事ゆゑに究めて倚り寄せと角へも鷹を捉れ、練鳥の着
 ころも甲斐なきを怪物の嗜々と嗤ひく。仰さる推倒し一箇を頭の方へ蹴居て左
 右の手に捉扼し、老たる所の前より進み、妙の裳を推披た己も毛牒を露し、且犯え
 とせ、処を朱之女の看済し、克彎固め、彈と射る矢坪違ひ、老たる那怪物は背
 より胸前まで射徹し、所窮所の深狭、必要時も堪堪を苦と叫く仰反り、あひひ
 形は猶前前の御音を頭邊に居り、怪物は駭怖れ、妙を捨く走り、洞口をせし、
 程もあらず、朱之女の發つ二の笠前、亦吠と篋比深く射串れ、叫び果せ、仆まけり。
 登時朱之女のうらやま、喉と投捨く、要刀を抜放ち、引提く洞門、み找途つ死射く、仆
 し、怪物は是彼共、十々滅を刺し、拭く血刀を腰に飲め、件の妙を勦らんと。
 仰入り、月と燭を立よると、その妙の齒を切り、眼を閉て氣息を、目今、是
 救ひぬ、龍を屠り、珠を採らば、鳥許人似るべし、と獨語、遠く腰を吊る

其後
 枝
 男黙契

茶籠より茶を取、嚙推を、妙を抱起し、刀の附る掃枝り、齒を推用、
 吹入り、呼んと、まゆ小名を、あられ、あや、喃々と、その声、
 纒、小耳、入り、けん、妙の、う、な、これ、あ、り、く、多、足、を、縮、め、眼、を、因、り、朱、之、女、と、ま、り、も、
 視、を、吐、嗟、と、叫、ぶ、声、と、共、小、抱、れ、し、を、振、放、り、膝、の上、より、輾、落、く、戦、慄、を、さ、す、能、を、
 せ、し、朱、之、女、の、合、身、笑、る、う、臂、を、伸、り、と、曳、留、め、婦、人、の、ま、り、る、怕、れ、ぬ、を、俺、は、是、變、化、し、
 あ、る、今、宵、お、ま、の、宿、と、お、ん、身、の、與、ら、這、妖、怪、も、射、く、殺、す、の、形、を、且、よ、く、
 あ、ま、り、と、あ、う、と、い、ひ、指、さ、し、二、個、の、尸、骸、を、妙、の、ま、り、を、く、左、さ、る、右、さ、る、と、く、又、
 朱、之、女、を、は、く、と、ち、ち、と、胸、を、拵、下、し、原、來、お、ん、身、の、妻、を、與、ら、這、福、鬼、を、讓、せ、し、
 人、中、海、ま、ま、よ、る、伴、も、俱、せ、し、只、い、つ、深、山、宿、し、あ、り、と、故、を、あ、い、つ、ふ、を、と、誑、回、
 る、朱、之、女、あ、は、れ、ぬ、情、由、を、ぬ、俺、の、恁、々、を、且、姓、名、を、告、知、り、君、命、を、と、り、
 東、國、より、來、り、六、田、の、旅、亭、に、入、り、俟、つ、び、日、を、弥、る、徒、然、不、堪、さ、り、け、し、け、し、
 十
 十

あり獲りて。獲物を食ひ路も迷ふ。後僕も後れぬ。せん樹をささる。石室の天明
 るを俟て。抑おれ。何処の人か。這怪物も捉れ。を向ひされ。おれ。よ。妻の
 山の麓より程遠く。上市の御世を渡る。杜木の落葉を女見。斧柄と喚を伴
 る。嬪婦主人のあはれ。家則の嚴中。臆より外に出され。漫然とせ。このまはる。あ
 厄難。甲夜虫。母親共。侶の妾中の比。綿を摘み。臥房に入り。睡。忽地親の
 外に出。を頻り。喚起。を声。睡耳。入。これ。あ。應。遠。起。て
 門の戸を。颯と。推開け。親中。あ。を。ろ。い。非常。の物。右左。より。妾。と。推。扱
 みる。宙。吊。して。走る。あ。身。の。妖。怪。の。捉。れ。け。と。初。暁。得。れ。を。甲。斐。の。あ。り
 外。小。走。あ。這。山。中。は。打。て。来。れ。命。も。既。危。り。せ。刀。袷。小。枚。れ。嶺。上。の
 松。より。弥。高。現。再。生。の。大。恩。之。暁。未。程。あ。る。家。路。小。送。り。あ。つ。親。比。飲。び
 あり。身。の。幸。ひ。何。の。快。亦。これ。優。志。死。ん。憐。愍。と。他。夏。も。や。く。憑。む。言。葉。の。露

よも。腕。の。袖。の。涙。へ。長。夜。あ。り。古。あ。れ。深。山。の。真。明。る。あ。毎。星。光。枝。疎。の。取
 ず。朱。之。火。の。山。と。下。ら。ん。と。斧。柄。を。後。不。立。り。出。て。捨。て。る。皆。前。と。り。揚。げ。路。を。微
 ゆ。く。山。脚。の。方。へ。赴。ん。と。る。程。遥。く。は。鉦。鼓。の。音。響。き。と。研。を。誘。ひ。其。人。許。多
 蕉。火。を。振。照。し。諸。声。合。と。や。斧。柄。喃。の。あ。る。と。呼。声。漸。々。近。つ。て。這。裡。を
 望。み。来。れ。け。れ。斧。柄。の。朱。之。火。も。彼。正。く。里。人。の。迹。を。尋。ね。来。ぬ。ふ。と。と
 災。の。軀。を。走。り。對。ふ。と。應。唯。々。と。合。へ。を。鳴。ら。し。抗。を。只。管。不。指。招。を。山
 挾。皓。く。る。隨。う。ら。ん。と。欽。里。の。衆。人。原。来。斧。柄。の。恙。なく。那。首。不。居。り。と。散。動
 め。た。る。そ。中。一。個。の。武。士。年。齡。三。十。許。る。が。先。立。て。近。つ。て。来。る。朱。之。火。を
 と。皆。前。を。挾。む。と。信。と。え。く。小。松。を。看。み。回。る。寄。ら。ぬ。忽。地。小。声。を。う。け。斧。柄。不。傳
 ち。く。咱。們。を。招。ひ。し。何。人。ぞ。同。ま。く。朱。之。火。の。此。も。擬。議。を。掩。と。東。國。に
 の。る。六。甲。不。入。く。旅。宿。と。ま。る。徒。然。勝。む。と。さ。の。這。山。を。獵。す。略。不。迷。す

板屋を背負く起臥する。寒けは冬の夜多し。この山標が突然と来り地炕の火も當るを人食熟く駭怖れ。渠が随意に暖られば渠も亦害なき。黙然として時方やわやくやくのそり。ゆれも人死折あ。或は樵夫の割篋を竊る衣物も竊去りく被り。嘆ひもまたこの嘗て好く谷川を蝦を捕喰ふ。嬉るも大にわらふ。その高老を麻一の黒の婦女子と扛擡ひ。犯て後その血を吸ふと豫く。味不果しく差つて最憎む。死ののすを。この領く箭五郎の衆人をさへり。這山標の亡骸を里へ牽りてゆへに要る。然ればと夫の尻うち棄措ん。快く去る。たほの西三名送り。卑しく火をけり。又杜依達一兩名の先へ走せり。落葉の刀自。夫の爲体を報知らぬ。と。このす。又朱之入らち對ひ。此ひけ。恩あ。斧柄と異。よ。と。親の歎ひ。わ。咱們も面を起。幸ひ。火。是より上市る。宿所。宿所。宿所。時立より。渠が親も對面。多。勿論。田舎の。り。ま。ど。

是より先
巡嶋記
狒々
公彦小山
猫
至
と
者
出
ど
香
味

はせる御食心。心。を。辱。く。と。六甲。道。前。ある。路。の。序。次。も。タ。ラ。シ。く。柱。を。大。の。議。と。引。引。く。彼。首。で。休。息。の。ひ。終。と。い。ふ。と。然。る。り。と。衆。人。も。誘。引。立。り。己。さ。る。れ。朱。之。入。の。推。辞。も。く。遂。に。その。意。を。任。じ。ゆ。ゆ。び。ら。竹。前。と。推。方。を。と。終。斧。柄。と。共。侶。前。五。郎。の。御。導。と。せ。り。て。上。市。の。赴。く。程。の。午。の。貝。吹。く。比。及。よ。杉。木。の。落。葉。木。が。宿。所。の。末。の。けり。却。説。這。上。市。の。落。葉。木。と。喚。ぶ。老。女。あり。原。是。主。人。の。女。弟。之。十。餘。の。前。比。家。あ。る。ト。時。疫。中。く。夫。婦。ら。ち。續。に。身。ま。う。つ。家。の。一。個。の。女。兒。あり。是。則。斧。柄。の。外。小。憑。に。親。族。を。け。れ。斧。柄。が。成。長。る。ま。と。と。後。見。ど。く。線。遠。ま。世。帯。車。の。篋。の。糸。の。ま。光。陰。を。織。細。く。世。渡。る。業。小。暇。を。嬌。あ。り。て。あ。り。け。れ。婢。妾。二。面。名。使。の。先。代。より。の。田。も。園。も。人。を。傭。や。く。畹。さ。せ。富。む。あ。り。あ。り。く。も。あ。り。て。驕。る。ぬ。山。里。の。足。を。知。る。衣。食。住。三。五。才。の。比。より。幼。稚。に。姪。を。護。艱。ひ。く。今。茲。二。八。の。り。の。良。婿。か。み。と。擇。め。ど。も。あ。ろ。ふ。慙。ふ。の。る。け。れ。原。の。依。ゆ。く。在。明。の。月。光。牙。牙。は。冬。の。夜。の。

美少保録二冊卷一



三才三景二冊卷一

十四

出像第廿七



斧柄を極ふ
朱之の
衆の
等小あふ
五郎

朱之心

斧柄

三才三景三冊卷一

三才三景三冊

良婿索てのきり願ひの如く世を捨たむとせむるは山歲月を送る不就て家の内小男
たほれ一個も在る斧柄が親の送り田園の總て人と備を耕すは所得十分
るぬども亦煩しむるもね。只且暮春小綿を摘み又糸を繰り布を織て之被も售りて
けまもも餓む凍む世を渡り親と兄との遺徳を吾侪が苦心も斧柄といふ家兄の
像見あれん現任せぬ浮世はゆる深も争う身材を伸く生心つく比るれど去歳の
春より彼此人の誂て婿を徴れも片山里の悲しき意小擇を律子けくアれば是を
あふる一徳の自負がうて鳥許るのの奉えんが先祖の南朝の忠臣と習えん
越智殿の家臣のけり家の口碑の傳へて子孫民間に降りてより世を累ねて家風を
喪ひ賸男児の絶果て女の子ひとりありぬも救救來救もあぬ甲斐野人の筋
るぬの堀小まゝのあはれむせぬれはをある年来一僕も使ぬの傭あ下の用心を
斧柄が與中も豫より注連を引けんかま意を用ひはるを人の笑ふ人情小疎死をの

そこのころの現任せぬの浮世はゆる。あふるが那如く來さぬの帰菴を俟ひぬ。吾
侪が婿を徴む難む。今生のう後世の與所願同くぬ。隨るらぬを物をも身と
摘てそ又人の痛さも察しゆるむ。目も押拭の過來ぬ物をも側穿て涙合む
斧柄が歎きの霧も外の時層に醉醒く心裏恥くた朱之女のさ。そのくもろり小猛
貌を更めく女ありと見賤せ。似非尊大なる容態を今ゆへ悔くぬひけり。

第二十二回

上市御小斧柄恩人を倡ふ
奇偶と感とと落葉姪女と妻とを
且しく朱之女の膝うち鳴く感嘆く。あふる優る刀自の用心男魂微らぬ。あま
よくあふ至らんや尚弱冠ある某もどか為る後學子あることまら。願ふ所願の時あ
るまの地を去らぬ俟んと欲む刀自才女もさむ。俺主君も猜しぬ。且其味

必親の似ざりけり甚る過世の福ありけん東國の武家の言々中の特よめて管
 領家扇谷の御内人と成發正室の御も。以てけりてとある二親連は恙もあらず俱武
 藏の御もたる御腹を異れおのの姉も袖のりふかりよけんかのとみ知らせよとのそ
 がこそと問母親の辭の間今を知る斧柄も膝を推找め且ら噂おきえる安濃
 津の叔母夫の子でさるる縁の絶ても川稻の迹の鳥は声破く心地をまる。立女が與
 後父姉妹も袖さぬ恙もなき。ゆめゆめも言まや。今の容子も知してと親子右
 ひりより俱おせさく問詰りて情由もねど恥も顔秋楓の朱之次。駒馬と及
 ば口の過困下果る頭を擡て且右を左とる。あまも嘆息して。とちのゆる今こ
 ら亦何ぞも隠去た親おぼゆるとさけれ。親身母子の親類欲由縁ある人欲ある
 とも目今袖とのりまの俺妹小夏のおねえ。俺うう言を盡さん。面正くもなれと
 ぐ。既おぼゆるお知られる親木偶人の咲も。華の洛陽に住むけん俺身絶れ

三才の比東國の御はく挿さんとも姉とつる身を携へ。母共侶お起りおぼゆる
 日もの禍鬼のあみお名を床磨鐵の山路踏む折とよ。星繁やわりの山豪は
 與ふこそおれ父の命を預せと志を折小亦俺妹。那山豪お投屠られ。千夜は合
 陥ら。骸も當めおれや。おのり。つる才より。時初て母も。死是より。後
 母親の眞愛の。十寸鏡。家も定め。鈴嬢ひ。或人お身を寓せ。十稔のまを
 送り。昔識人の誘引れ。陸奥へ。と。赴たる。小後音耗絶れ。純袴の体
 暇るを。安否も訪せ。ふた。有徳而俺身。も。或人お紹介せ。れ。遠く
 武藏へ。赴せ。扇谷家お仕。る。も。三四年。お過され。殊お主君の恩顧受た。く
 大事の使。お立られ。る。も。この。前。おの。ひ。刀。自。原。是。誰。が。妻。を。お。け。け。く
 俺親と好の。さ。え。知られ。けん。這。地。由。縁。あ。る。も。母。の。お。ね。え。の。感。ひ。の。詳。お。し。る。は。ね。と
 同。え。ま。れ。て。と。泣。く。母。が。袖。の。玉。の。れ。碎。く。斧。柄。の。藪。た。り。つ。る。く。落。葉。の。塵。は。本。の。丸

殿あわねも名告とせむ誰子ぞと知てあふんと愁をの姉の親の泣くふ跡
 ても恨くいと哀く形を昔と今も裸返を涙の瀧の切と絶今可歎をよみ久
 りやうなふ頭と擡け目と拭ひく喃末松ぬおん母のつらうと告め知らさそ
 過ぎまうて得お忍むよあれはけし名告も面をさるる吾体は死に公の
 前妻と袖とのひの女兒の昔名小夏か生の母と。言可惜くもはるる人の答を
 公木偶々ぬ都やこの折々おの比那首お時め歌妓阿夏とのあひををて世は
 業もぬあつて足もつる心もち崩と鏡帛と首の水と年あまの便ひ
 個一故御中も京中も残りの借財の情のあふ家も庫をも人取ととく神
 風の五十瀬お住むよりくつるこれの妻子從類四落八散あつた時の悲ととて
 と想像りあ切と袖とを留め親里へおくつるいとあふる世物固兄芥
 ちうち腹立ち女の子とあふ父お隷て憂目とをせかひあふる自意お違はど

女弟おあひまといひかきおれお力及ぶ年もつらう四五才の獨女を色男狂まふ
 流ふしと身の聲蟬の裳脱けぞと昔里へひと帰るは世の秋の別れ悲く
 るはつと泣く泣くおあひまといひかきおれお力及ぶ年もつらう四五才の獨女を色男狂まふ
 歌舟子もあつた間と照らさるるおあひまといひかきおれお力及ぶ年もつらう四五才の獨女を色男狂まふ
 一阿夏とのとひとあひまといひかきおれお力及ぶ年もつらう四五才の獨女を色男狂まふ
 袖と河原へおあひまといひかきおれお力及ぶ年もつらう四五才の獨女を色男狂まふ
 又の累おあひまといひかきおれお力及ぶ年もつらう四五才の獨女を色男狂まふ
 乙袖の五六才より河原掙りの疲勞足蹴輾ひく怪我せむ然母も幼稚は
 女見よ掙りおあひまといひかきおれお力及ぶ年もつらう四五才の獨女を色男狂まふ
 泣顔隠さ兄嫂おあひまといひかきおれお力及ぶ年もつらう四五才の獨女を色男狂まふ
 せぬる秋の比木偶々ぬの妻子を携て鎌倉へと起りぬるを後いづれを

人々けり。鶏が鳴く。東路遠く想像も身の憂鬱の敷き。兄谷七も嫂中も死
 別れより生別れる。乙柚とあの眼のあざ。這家のの芥柄のの口。夕ひとろ小兼
 持て字む姪お母と呼れ親と稱へ。護養へ渠も草本も孝行なる思愛情義
 西も。這の隔も。咱子と捨て兄の子。子とせ。是過世の業。因約束も
 あ。け。ん。と。ひ。と。ら。憂。鬱。の。一。も。忘。れ。七。年。を。歴。の。の。昨。夕。芥。柄。が。禍。鬼。の。呼。出。し。れ。

必死の死と極ひ人の心。お故の夫の思ふ。死と知。このも。と。ま。り。を。木。偶。々。め。も。

乙柚の小夏も。山路。死天の旅。あ。て。返。る。ぬ。人。の。敷。入。の。あ。ま。り。十。あ。ま。り。七。松。と。ひ。

け。ま。も。知。と。今。皆。く。哀。傷。悲。愁。草。昔。の。末。の。波。か。由。り。戻。る。と。の。あ。て。子。由。あ。

泣。ぬ。の。あ。ん。や。哀。れ。た。う。る。と。声。そ。く。泣。沈。む。る。姨。捨。の。目。さ。か。な。慰。め。難。一。芥。柄。の。

俱。泣。声。立。く。幼。稚。比。ら。綿。摘。と。あ。雷。夜。寐。す。と。ひ。の。目。覚。一。草。の。母。と。る。の。説。

示。ま。あ。ひ。乙。柚。さ。る。の。ひ。の。痛。ま。と。ひ。骨。肉。の。妙。品。年。圃。も。環。會。ふ。と。も。

あん。と。あ。ら。う。の。果。敢。る。た。と。た。の。一。ま。の。俣。う。ひ。あ。の。異。母。も。そ。の。合。い。わ。り。あ。ひ。さ。く。消。

中。人。の。花。七。秋。八。才。と。期。と。け。ん。我。も。命。の。浪。速。江。の。短。は。蘆。の。ゆ。い。あ。あ。せ。逢。逢。さ。り。

一。ま。ら。あ。の。あ。ま。り。誰。が。名。つ。ら。ん。所。と。往。方。の。磨。針。の。の。も。と。ろ。も。叔。母。夫。と。さ。死。

死。生。の。海。ま。く。人。の。心。の。風。波。の。起。こ。ま。る。く。つ。も。も。長。胸。う。ん。を。形。な。る。の。歎。け。の。ま。く。秋。

子の悲泣と朱之人の慰め。と。目。蓋。と。頭。の。低。黙。然。る。と。半。响。ら。り。又。死。の。あ。ま。を。

這。身。お。と。も。面。目。も。一。恸。の。ひ。の。子。と。と。親。と。識。ら。ぬ。似。れ。も。亡。父。木。偶。々。の。放。蕩。

無頼の論。さ。も。足。ら。ぬ。と。秋。心。さ。の。怨。ひ。よ。も。産。破。り。妻。子。を。離。別。後。妻。あ。

口。を。餅。さ。く。恥。と。せ。中。の。朽。を。く。も。亦。歎。く。死。と。あ。な。ん。小。生。不。才。と。の。い。ふ。今。よ。る。見。



笠前九郎

朱之介

主玉



出像第廿八

上市乃莊あつちの舎まうまの落あつち葉え
 朱之介乎管待あつちのま

落葉

芥柄

年極の比ふものあらん。この義を允一のへり。とふ朱之介の領に。その各の随立意を。
 へり。市上りる叔母の宿所へ韓櫃と遣まゆ。別の人を傭ん。汝達の翌朝。より
 多く。發足せ。且盤纏を。とれ。とて。行囊より。金銭。數出。分ち。て
 二人。小与。介坊。二受。戴。して。務。て。大。く。その。詰。朝。朱。之。介。の。恩。を。謝。し。別
 れ。且。是。旅。亭。と。出。て。西。に。けり。この。日。亭。午。の。比。及。小。安。保。前。五。郎。の。旅。亭。小。來。て。其。之。介。の
 對。面。且。婚。縁。熟。譚。の。勢。と。速。來。由。告。げ。け。黄。道。吉。日。に。今。宵。婚。姻。の。際。
 一。と。落。葉。の。刀。自。の。の。有。徳。和。君。の。行。本。と。送。り。上。市。運。移。し。那。裡。赴
 ぬ。と。ふ。朱。之。介。の。異。説。も。二。個。の。後。者。と。出。遣。り。結。の。趣。と。告。る。韓。櫃。と
 早く。入。足。と。傭。ん。と。相。譚。ま。前。五。郎。の。旅。亭。主。人。の。示。し。七。猛。四。下。の
 莊。客。と。傭。ん。と。韓。櫃。と。早。けり。然。程。小。朱。之。介。の。旅。亭。主。人。の。坐。席。と。返。り。且。つ。れ
 房。錢。を。取。せ。り。と。前。五。郎。と。其。侶。小。韓。櫃。と。先。小。早。く。松。木。の。落。葉。か。宿。所。不

来。けり。これ。を。認。り。里。人。們。の。那。韓。櫃。と。婿。の。衣。裳。と。調。度。な。ん。と。必。ひ。けり。ゆ。と。落
 葉。の。早。閑。より。よ。う。づ。の。儲。小。暇。る。く。斧。柄。不。結。髮。化粧。を。し。く。准。備。せ。り。ゆ。く
 整。比。氷。人。安。保。前。五。郎。の。俱。せ。れ。朱。之。介。の。來。けり。且。二。箇。の。韓。櫃。と。庫
 中。小。扛。納。さ。て。傭。人。足。們。を。返。遣。し。叔。朱。之。介。の。儲。の。席。小。著。り。め。前。五。郎。の。も
 茶。と。看。て。飲。び。と。述。る。忙。し。い。ゆ。ゆ。も。あ。る。左。右。の。程。日。の。暮。一。の。燭。臺
 二。本。小。の。措。並。斧。柄。と。席。小。著。り。め。朱。之。介。と。婚。姻。の。盃。と。執。結。さ。る。氷。人。前
 五。郎。が。妻。多。り。けり。奥。の。午。の。比。より。來。て。り。良。人。と。俱。小。這。婚。姻。の。席。小。列。て。執。持。て
 千。秋。万。歳。と。壽。延。けり。婢。不。用。意。不。出。婚。席。を。素。より。田。舎。の。る。る。れ。の。華。や。り
 る。所。儲。り。と。い。ふ。美。女。美。少。年。一。對。小。洞。房。花。燭。も。光。を。増。ん。錦。の。上。小。花。を
 添。え。夫。妻。あ。り。と。批。評。し。嘆。賞。せ。る。い。る。や。と。恨。所。心。ざ。ぬ。美。惡。賢。不
 肖。の。差。あり。て。對。ま。ぐ。も。あ。る。と。今。の。と。記。あ。る。ゆ。り。けり。ゆ。ゆ。の。愛。を。

丁々皆美次くおのぬる。さて落葉の次の日餅を四鄰の里人と佐前五郎が宿所
 餽遣していぬ日斧柄をわくわく報ひとし且招坪の正ま告て稍宿念を思本
 けり是より一朱之介を。松木の宿の起臥しるま正あやく日と弥は小夫婦睦
 一ゆるぬ小あねと斧柄のとうづ折目正しく浮たる正露なるもやれを朱之介の
 むひの中似せ洞房の間中を趣るを憾とせり況落葉の朱之介を宿
 客のてくふく。苟且中もうちきけと要るはふのり毛然とく疎くもせま
 斧柄が心つたるま正の陰に立教諭と。何事も朱之介の不自由あせとを
 機をうくれども朱之介の夫大く困ど。繭懸を頸を絞らるとの世の鄙語の似居
 心地し時々支ふ假托て佐前五郎許赴てうち譚ふせめての保親をたといひ畢竟
 朱之介が佐前五郎と友とて又甚麼る説話うわ。そと次の巻の解分るを聴杯や。

近世説美少年録第三輯卷之一終



